

近畿自動車道名古屋神戸線(四日市 JCT ～亀山西 JCT) 建設事業に伴う

## 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ



2017 (平成29) 年9月

三重県埋蔵文化財センター





鈴山遺跡全景（東から）



鈴山遺跡竪穴住居群（真上から）





鈴山遺跡S H 108 石囲い炉 (北から)



鈴山遺跡出土遺物



## 例 言

- 1 本書は、平成28年度に実施した近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。

- 3 調査は、下記の体制で実施した。

委託者 中日本高速道路株式会社四日市工事事務所  
受託者 三重県教育委員会  
調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究3課（四日市駐在）  
課長 森川常厚（兼副参事）  
主幹 服部芳人（課長代理）・水橋公恵  
主査 中村法道・泉賢治・谷口信博  
主任 高松雅文・西脇智広・村上 央

- 4 調査面積・期間等は下表による。

遺跡名（調査次）	調査面積（㎡）	調査期間	担当者	作業受託
鈴山遺跡（一次）	174	H28.4.11～H28.4.14	中村・泉・村上	（ネクスコ労務提供）
鈴山遺跡（第3次）	1,563	H28.6.7～H28.9.27	中村・泉	株式会社丸文工業
高ノ瀬遺跡（一次）	237.5	H28.6.13～H28.6.20	西脇・村上	（ネクスコ労務提供）
折子遺跡（一次）	570	H28.6.21～H28.7.1	西脇・村上	（ネクスコ労務提供）
釜垣内遺跡（工事立会）	50	H28.4.18	西脇・村上	（ネクスコ労務提供）

- 5 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の諸先生・諸氏にご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。  
中野晴久 藤澤良祐 三浦雅幸（敬称略）
- 6 本書で示す方位はすべて座標北で示し、測量には世界測地系を用いている。
- 7 本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。  
SH：竪穴住居 SD：溝 SK：陥し穴

## 本文目次

- 1 前言…………… (服部) (1)
- 2 鈴山遺跡 (一次) …… (泉) (5)
- 3 鈴山遺跡 (第3次) …… (泉) (6)
- 4 高ノ瀬遺跡 (一次) …… (西脇) (13)
- 5 折子遺跡 (一次) …… (村上) (14)
- 6 釜垣内遺跡 (工事立会) …… (西脇) (15)



## 写真目次

表紙	鈴山遺跡から鈴鹿山脈を望む (南東から)	
巻頭図版1	鈴山遺跡全景 (東から)	
	鈴山遺跡竪穴住居群 (真上から)	
巻頭図版2	鈴山遺跡 S H 108 石囲い炉 (北から)	
	鈴山遺跡出土遺物	
1 前言		
写真1	三重県埋蔵文化財展……………	4
写真2	三重県埋蔵文化財展 成果報告会……………	4
写真3	八郷の歴史探検隊出前講座……………	4
写真4	鈴山遺跡現地説明会……………	4
写真5	朝明中学校2年生整理所訪問……………	4
写真6	北星高校出前講座……………	4
2 鈴山遺跡(一次)		
写真7	調査坑16(東から)……………	5
3 鈴山遺跡(第3次)		
写真8	調査区全景(北上空から)……………	6
写真9	S H 106(東から)……………	8
写真10	S H 106 炉(北から)……………	8
写真11	S H 107(南西から)……………	8
写真12	S H 107 礫出土状況(南西から)……………	8
写真13	S H 108(南から)……………	9
写真14	S H 108 石囲い炉・断ち割り(西から)……………	9
写真15	竪穴住居群(南東から)……………	9
写真16	S K 113(北東から)……………	10
写真17	S K 114(北東から)……………	10
写真18	出土遺物……………	10
写真19	S H 108 石囲い炉(南から)……………	12
4 高ノ瀬遺跡(一次)		
写真20	調査坑45(東から)……………	13
5 折子遺跡(一次)		
写真21	調査坑8(西から)……………	14
写真22	調査坑9(東から)……………	14
6 釜埴内遺跡(工事立会)		
写真23	調査区(南から)……………	15

## 挿図目次

1 前言		
図1	遺跡位置図(1:100,000)……………	3
2 鈴山遺跡(一次)		
図2	調査坑位置図(1:2,000)……………	5
3 鈴山遺跡(第3次)		
図3	調査区位置図(1:2,000)……………	7
図4	遺構略図(1:500)……………	7
図5	S H 106 実測図(1:80)……………	11
図6	S H 107 実測図(1:80)……………	11
図7	S K 114 実測図(1:40)……………	11
図8	S H 108 実測図(1:80)……………	12
図9	S H 108 石囲い炉実測図(1:20)……………	12
4 高ノ瀬遺跡(一次)		
図10	調査坑位置図(1:2,500)……………	13
5 折子遺跡(一次)		
図11	調査坑位置図(1:2,000)……………	14
6 釜埴内遺跡(工事立会)		
図12	調査坑位置図(1:2,500)……………	15

## 表目次

1 前言		
表1	近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT~亀山JCT)埋蔵文化財発掘調査経過表……………	2
表2	普及公開活動一覧……………	4
2 鈴山遺跡(一次)		
表3	調査結果一覧……………	5
3 鈴山遺跡(第3次)		
表4	竪穴住居一覧……………	10



# 1 前 言

## 1. はじめに

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路）の四日市JCT～亀山西JCTにかかる埋蔵文化財発掘調査を、平成20年度から実施している。

平成20年度から平成27年度に実施した発掘調査の概要は、発掘調査概報Ⅰ<sup>①</sup>、Ⅱ<sup>②</sup>、Ⅲ<sup>③</sup>、Ⅳ<sup>④</sup>、Ⅴ<sup>⑤</sup>およびⅥ<sup>⑥</sup>として、また、平成20年度に発掘調査を実施した伊坂窯跡と、平成21年度に発掘調査を実施した伊坂城跡第3次・伊坂遺跡第5次調査の結果については、発掘調査報告<sup>⑦</sup>を刊行し、公表している。その中に当該遺跡の発掘調査成果はさることながら、新名神高速道路事業の概要や発掘調査に至る経緯、保護措置などについても記載しているため、参照されたい。

## 2. 平成28年度の調査

### (1) 現地調査

発掘調査面積の減少に伴って、昨年度からさらに職員の数が減る中、年度当初の計画としては、鈴山遺跡、折子遺跡の2遺跡の二次調査を計7,300㎡、鈴山遺跡、折子遺跡、高ノ瀬遺跡の3遺跡の一次調査を計900㎡、合計8,200㎡の発掘調査が予定された。

一次調査の内、鈴山遺跡については、遺構・遺物ともに確認したため、二次調査を行った。しかし、折子遺跡、高ノ瀬遺跡については、いずれも遺構、遺物が確認されず、二次調査の必要が無くなった。そのため、結果的には、二次調査は1,563㎡、一次調査は計981.5㎡、合計2,544.5㎡の発掘調査を行うこととなった。

### (2) 室内調査

今年度は、現地調査が概ね年度前半で終了したため、出土遺物の洗浄・注記等の一次整理及び二次整理作業と並行しながら、過年度に発掘調査を実施した遺跡の報告書作成を行った。また、昨年度調査を実施した発掘調査概報の作成も行った。

## 3. その他

発掘調査の概要については、報道機関などへ資料提供を行うとともに、現地説明会を9月17日に鈴山遺跡で実施した。また、地元団体や高等学校への出前講座等も行った。

8月11日には、新名神高速道路の四日市JCT～新四日市JCT間、東海環状自動車道の東員IC～新四日市JCT間の開通式が行われた。その当該年度という事もあり、この区間で行われた発掘調査の成果を中心に、「高速道路発掘物語～新発見ぞくぞく！朝明のいにしえ～」と称して、出土遺物や写真パネル等の展示を、そらんぼ四日市（四日市市立博物館）4階特別展示室で催した。また、期間中4回の成果報告会も行った。四日市市内はもちろん、県内外の多くの方々にも参加、観覧していただいた。

### 【註】

- ① 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』2010
- ② 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012
- ③ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013
- ④ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014
- ⑤ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』2015
- ⑥ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』2016
- ⑦ 三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』2011・三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡（第3次）発掘調査報告』2012



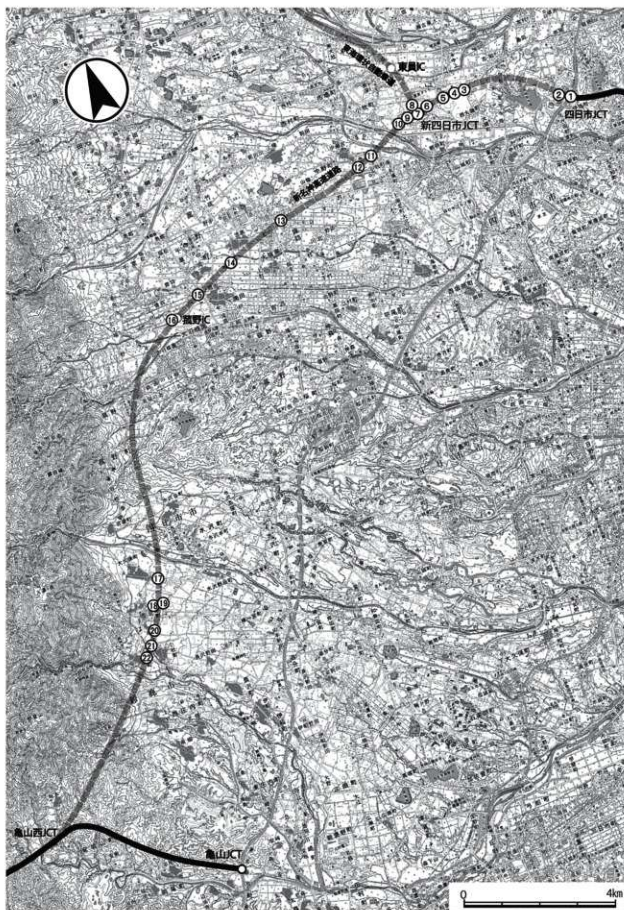


図1 遺跡位置図 (1:100,000)

内 容	所在地・会場	開 催 年 月 日	参加人数
第35回 三重県埋蔵文化財展 『高遠遺跡発掘物語 ～新発見ぞくぞく！朝明のいにしえ～』	そらんぼ四日市（四日市立博物館）4F 特別展示室	平成28（2016）年6月14日（火） ～7月17日（日）	4,594名
八郷地区 歴史探検隊 出前講座	八郷地区市民センター	平成28（2016）年8月29日（月）	20名
鈴山遺跡（第3次） 現地説明会	三重郡菟野町	平成28（2016）年9月17日（土）	234名
四日市市立朝明中学校2年生	四日市整理所	平成28（2016）年10月20日（木）	46名
北星高校 出前講座	北星高校	平成28（2016）年12月25日（日） 平成29（2017）年1月5日（木）	13名

表2 普及公開活動一覧



写真1 三重県埋蔵文化財展



写真2 三重県埋蔵文化財展 成果報告会



写真3 八郷の歴史探検隊出前講座



写真4 鈴山遺跡現地説明会



写真5 朝明中学校2年生整理所訪問



写真6 北星高校出前講座

## 2 鈴山遺跡（一次）

### 1. はじめに

鈴山遺跡は、竹谷川の上流南岸、鈴鹿山脈東麓の扇状地の標高90m付近に位置し、三重郡菟野町大字音羽に所在する。平成19年度に行った分布調査で、石礫や剥片を採取し、縄文時代の集落跡である可能性が考えられた。平成25年度に行った一次調査で、縄文時代の土坑や竪穴住居と推定される遺構や中期後葉の土器を確認した。平成27年度の第2次調査では、6,300㎡を対象とした発掘調査を行い、縄文時代早期の標道付が穴、集石炉、縄文時代中期の竪穴住居、掘立柱建物、陥し穴を検出した。



写真7 調査坑16（東から）

### 2. 調査の概要と結果

平成28年度は、平成27年度の第2次調査の東側、舌状丘陵の先端にあたる箇所での調整池の建設が計画された。そこで東西2本、南北1本の計3本（T16・T17・T18）の調査坑合計174㎡を設定して遺構、遺物の有無についての調査を行った。T16でピット、縄文土器、T17で竪穴住居の主柱穴と思われるピット、縄文土器を確認した。今回の調査結果から、縄文時代の集落が存在すると判断し、二次調査の対象とした。

調査坑	調査面積		検出面までの 平均深さ (cm)	遺構	遺物
	幅 (m) × 長さ (m)	(㎡)			
T16	2 × 47 (94)		35.7	ピット	縄文土器片
T17	2 × 33 (66)		43.7	竪穴住居?	縄文土器片
T18	2 × 7 (14)		72.5	-	-

表3 調査結果一覧

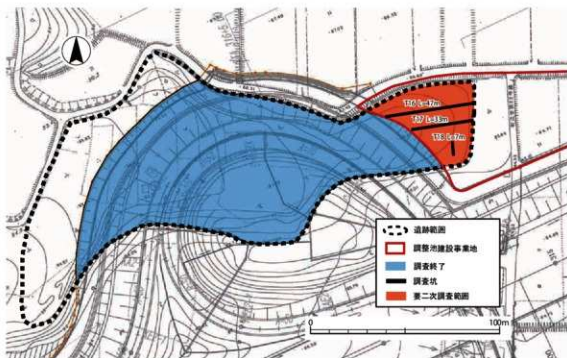


図2 調査坑位置図 (1:2,000)

### 3 鈴山遺跡（第3次）

#### 1. はじめに

鈴山遺跡は、竹谷川の上流南岸、鈴鹿山脈東麓の隆起扇状地の標高90m付近に位置し、三重郡菟野町大字音羽に所在する。平成19年度の分布調査において石鏃や剥片を採取したことから、縄文時代の集落跡である可能性が考えられた。

平成25年度の一次調査では、縄文時代の土坑や竪穴住居を検出し、中期後葉の土器が出土した。

平成27年度の第2次調査では、縄文時代早期の煙道付炉穴、集石が、縄文時代中期の竪穴住居、掘立柱建物、陥し穴を検出した。

平成28年度は、昨年度調査の東側で調整池の建設に伴い、3本の調査坑を設定して一次調査を行い、竪穴住居と思われる遺構及び縄文土器片を確認した。このことから、1,563㎡を対象とした第3次調査を行った。

#### 2. 縄文中期の遺構

調査区中央部で竪穴住居5棟、陥し穴1基を確認した。また、北東部で陥し穴1基を確認した。

##### (1) 竪穴住居

**SH106**（図5、写真9・10） 調査区中央部で検出した。東西5.0m、南北4.5mを測り、平面形は円形より隅丸方形に近い。平面プランは、最大径0.8mを測る主柱穴を四隅に配し、最大幅0.2mの壁周溝が巡る。主柱穴の直径が大きいのは、柱を抜き取る際にできた抜き取り痕ではないかと思われる。

中央よりやや西よりに屋内炉を有し、主柱穴のうち東側二つの柱間は2.7mであるのに対し、西側二つの柱間は2.3mとやや狭い。また、壁周溝の東辺中央付近には、埋堯を配したと考えられる直径1mの土坑を検出した。これらのことから住居の出入り口は東側であると思われ、出入り口から炉までの空間をより広くとる意図がうかがえる。このような平面



写真8 調査区全景（北上空から）



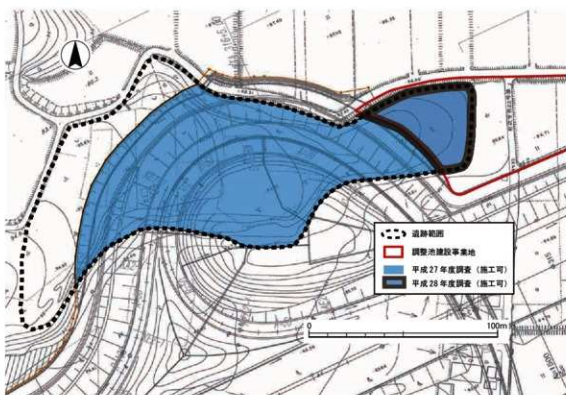


図3 調査区位置図 (1:2,000)

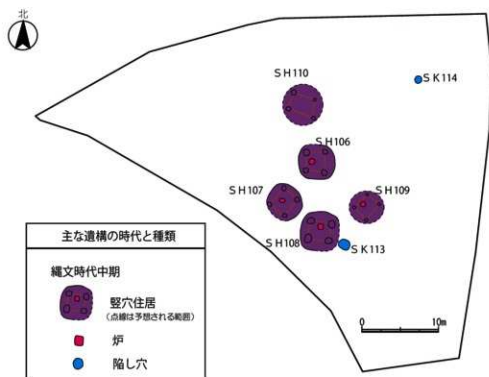


図4 遺構略図 (1:500)

プランは、県内では小牧南遺跡<sup>2</sup>にあり、岐阜県では宮之脇遺跡<sup>2</sup>、塚原遺跡<sup>3</sup>、畑畑遺跡<sup>2</sup>に類例がある。

炉付近および主柱穴からは、土器片が集中して出土した。炉付近からは、被熱痕のある人顔大の礫を検出し、石囲い炉に用いられていたのではないかと推定される。炉の焼土厚は、最大5cmである。

出土遺物として、埋土から出土したササカイトの表皮が確認できる剥片、炉から出土した立体的な装飾の縄文土器片がある。



写真9 SH 106 (東から)



写真10 SH 106 炉 (北から)

SH107 (図6、写真11・12) SH106の南西で検出した。東西4.6m、南北4.8mを測り、平面形は円形より隅丸方形に近い。平面プランは、最大径0.64mを測る主柱穴を四隅に配し、最大幅0.22mの壁周溝が巡るが、南側の壁周溝は、後世の削平により確認できなかった。主柱穴の直径が大きいのは、柱を抜き取る際にできた抜き取り痕ではないかと思われる。主柱穴のうち東側二つの柱間は2.8m、西側二つの柱間は2.8mである。壁周溝東側に小穴を複数確認したこと、中央よりやや西に焼土厚最大4cmを測る屋内炉を有していることから、東側が出入り口であったと思われる。

出土遺物には、縄文土器、石鏃、切目石鏃があり、石囲い炉に用いたと推定される礫を多数検出した。



写真11 SH 107 (南西から)



写真12 SH 107 礫出土状況 (南西から)

SH108 (図8・9、写真13・14) SH106の南で検出した。東西約5.0m、南北5.3mを測り、平面形は隅丸方形に近い。最大径1.2mを測る主柱穴を四隅に配し、最大幅0.16mを測る壁周溝が巡るが、東から南にかけては、後世の削平により確認できなかった。主柱穴の直径が大きいのは、柱を抜き取る際にできた抜き取り痕ではないかと思われる。

中央よりやや北側に0.9m四方を測る石囲い炉を有し、主柱穴のうち南側二つの柱間は2.9m、北側二つの柱間は2.8mである。また、壁周溝の南辺中央付近には、埋甕を配したと考えられる直径0.48mを測る小穴を検出した。このことから住居の出入り口は南側であると思われる。出入り口から炉までの空間をより広くとの意図がうかがえる。

石囲い炉には、厚さ最大4cmの被熱痕がある。住居の奥部であると思われる北側に縦0.13m、横0.6mを測る礫を配している。元は一つの礫であったものが、炉での煮炊きによる急激な温度変化によって割れたと思われる。石囲い炉では、厚さ2cmほどの裏込

めを確認した。石囲い炉を形成する礎のうち、西側の一部は検出されなかった。

出土遺物には、縄文土器、サヌカイト製の石鏝、チャートの剥片、黒曜石の剥片がある。



写真 13 SH 108 (南から)



写真 14 SH 108 石囲い炉・断ち割り (西から)



写真 15 竪穴住居群 (南東から)

**SH 109** 調査区南東部、SH 107の東約6mで検出した。壁周溝は、北側から西側にかけての一部分しか確認できなかった。平面形は円形に近かったと思われる。主柱穴の直径は、最大0.42mを測った。主柱穴のうち一つは0.075mと非常に浅く、上部は削平されたと思われる。主柱穴のうち北西側の二つの柱穴間は2.4mを測り、南東側の二つの柱穴間は北西側と比べやや広く2.65mを測った。中央よりや

や北西に被熱跡のある屋内炉を確認した。炉の焼土厚は、最大0.04mであった。これらのことから、住居の出入り口は南東側であると考えられ、出入り口から炉までの空間をより広くとる意図がうかがえる。炉周辺からは、縄文土器、石鏝、切目石鏝が出土した。

**SH 110** 調査区西部、SH 106の北約2mで検出した。壁周溝および炉は検出されず、最大径0.46mを測る四つの主柱穴のみの検出となった。主柱穴のうち南側の二つの柱穴間は3.3m、北側二つの柱穴間3.0mよりも広いことから、出入り口は南側であったと思われる。

## (2) 陥し穴

**SK 113** (写真16) SH 108の東で検出した。概ね楕円形を呈し、長径1.88m、残存深0.84mを測る。

底部から、礎及び切目石鏝が出土した。陥し穴は、通常居住域と離れた場所を選んで造られることが多いため<sup>※</sup>、SH 108とSK 113は、同時期に存在していたものではないと思われる。ただし、時期の前後関係は不明である。

**SK 114** (図7、写真17) 調査区北東部で検出した。概ね円形を呈し、長径0.95m、残存深0.70mを測る。底部中央に、長径0.28m、残存深0.28mを測る杭穴を有する。遺物は出土しなかったが、形状から陥し穴であると判断した。

## 3. 出土遺物

今回の調査では、コンテナバット22箱、約50.6kgの遺物が出土した。

出土した縄文土器は、うずまき文様や矢羽根状の文様、細い竹のような管状のもので突き刺した小穴などの文様が見られた。また、口縁部に立体的な装飾をもつものも見られた。これらの文様は、縄文中期後葉の中富式・神明式<sup>※</sup>土器の特徴を有する。

石器は、石鏝や剥片、石鏝が出土した。石鏝の石材は、チャートのほか、サヌカイト、下呂石及び黒曜石であった。



写真 16 SK 113 (北東から)



写真 17 SK 114 (北東から)



写真 18 出土遺物

遺構名	平面形	規模	
		長軸	短軸
SH106	隅丸方形	5.0	4.5
SH107	隅丸方形	4.8	4.6
SH108	隅丸方形	5.3	5.0
SH109	—	—	—
SH110	—	—	—

表4 竪穴住居一覧 (単位はm)

#### 4. まとめ

今年度の調査で、鈴山遺跡の東側の丘陵先端にも集落が存在していたことが明らかになった。竪穴住居よりも高度な建築技術を用いて造られた平地式住居である掘立柱建物<sup>3</sup>が第3次調査では確認できなかった。また、出土した古相を示す土器から、集落は第3次調査箇所である東側の方が古く、第2次調査箇所である西側へと移っていったと推定される。

出土した土器は、岐阜県美濃地方にある炉畑遺跡、戸入村平遺跡<sup>4</sup>から出土した土器とよく似た特徴を有する。

出土した石器や石材の剥片からは、大阪府と奈良県にまたがる二上山で産出されるサヌカイトや岐阜県飛騨地方で産出される下呂石、信州産と推定される黒曜石を確認した。石器の大きな剥片を竪穴住居から確認したこと、および竪穴住居の埋土の篩掛けによって石材の微細な剥片を確認できたことから、石材を遠方から入手し、この集落内で石器製作を行っていたことが推察できる。

これらのことから、当地の人々は、東西の文化と広域的に交流し、生活していたと考えられる。

#### 【註】

- ① 『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市)JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報VI』三重県埋蔵文化財センター2016
- ② 吉田英敏「宮之脇遺跡A地点」「宮之脇遺跡B地点」「川合遺跡群」可見市教育委員会1994
- ③ 篠原英政・吉田英敏『塚原遺跡・塚原古墳群』関市教育委員会1989
- ④ 大江まさる『炉畑遺跡発掘報告書』各務原市教育委員会1973
- ⑤ 宮田栄二「九州地方の陥し穴」『縄文時代の考古学5なりわい 食糧生産の技術』同成社2007
- ⑥ 篠原茂・高橋健太郎「中富式・神明式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会2008
- ⑦ 『岐阜県文化財保護センター調査報告書 第11集 徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集 戸入村平遺跡』財団法人岐阜県文化財保護センター1994

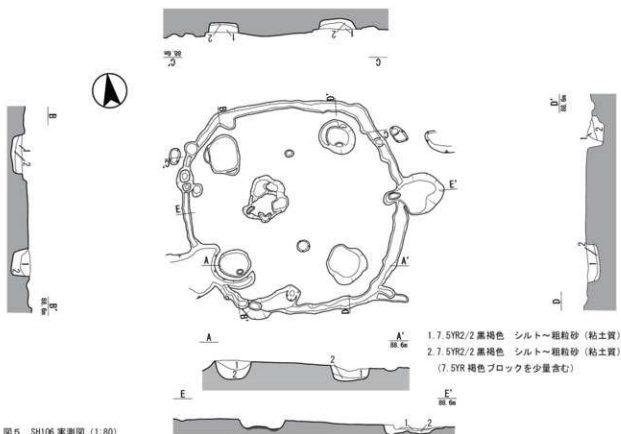


図5 SH106 実測図 (1:80)

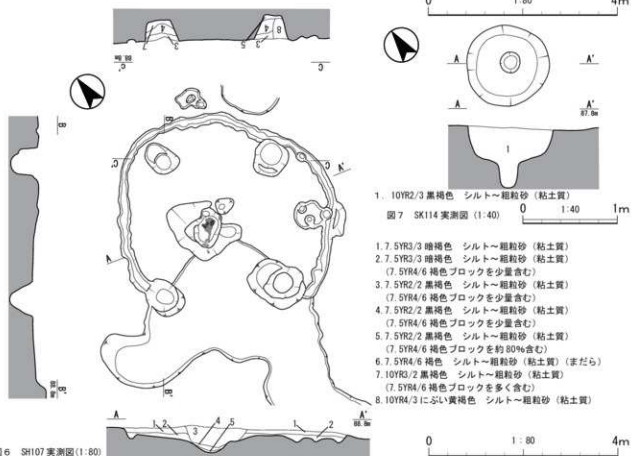


図7 SK114 実測図 (1:40)

図6 SH107 実測図 (1:80)

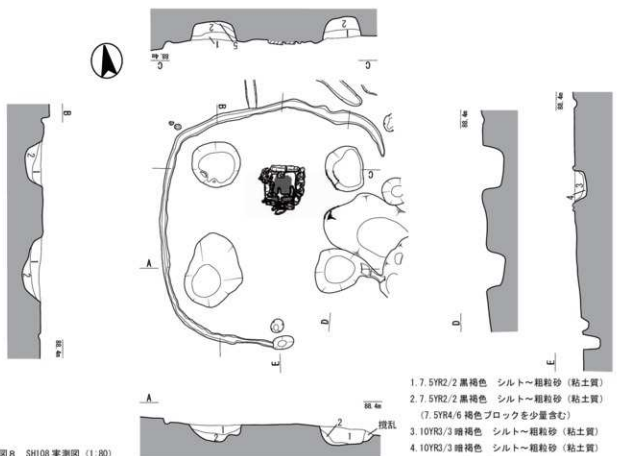


図8 SH108実測図 (1:80)

1. 7. 5YR2/2 黒褐色 シルト～粗粒砂 (粘土質)
2. 7. 5YR2/2 黒褐色 シルト～粗粒砂 (粘土質)
3. 7. 5YR4/6 褐色ブロックを少量含む
4. 10YR3/3 暗褐色 シルト～粗粒砂 (粘土質)
5. 10YR3/3 暗褐色 シルト～粗粒砂 (粘土質)
6. 7. 5YR4/6 褐色ブロックを微量含む
7. 7. 5YR2/2 黒褐色 シルト～粗粒砂 (粘土質)
8. 7. 5YR4/6 褐色ブロックを多く含む

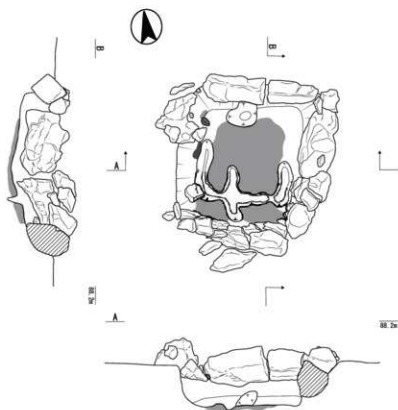


図9 SH108 石囲い炉実測図 (1:20)



写真19 SH108 石囲い炉 (南から)

0 1:20 1m

## 4 高ノ瀬遺跡（一次）

### 1. はじめに

高ノ瀬遺跡は鈴鹿市山本町字高ノ瀬に所在し、北の雲母峰、北西の入道ヶ岳から生ずる扇状地の扇端、標高159～162mに位置する。

平成22年度の分布調査では、灰釉陶器片や山茶碗片が広範囲にわたり発見され、平成24年度の調査では土師器甕の底部が出土したが、平成27年度の調査では遺構は皆無であった。

### 2. 調査の概要と結果

過去の調査では、安定した遺構面が確認されたのはわずかの範囲で、遺構は確認していない。今年度の調査において幅25mの調査坑を3本（T44～T46）設定し、調査を実施した。基本層は表土、黒色土、黄褐色シルトである。黄褐色シルト層で安定した面が見られ、深いところでは50cm～80cm以上

の厚さで確認できた。過去の調査ではこのような安定した面は確認されておらず、遺構検出の可能性が考えられたが、遺構は確認されず遺物も出土しなかった。



写真 20 調査坑 45（東から）

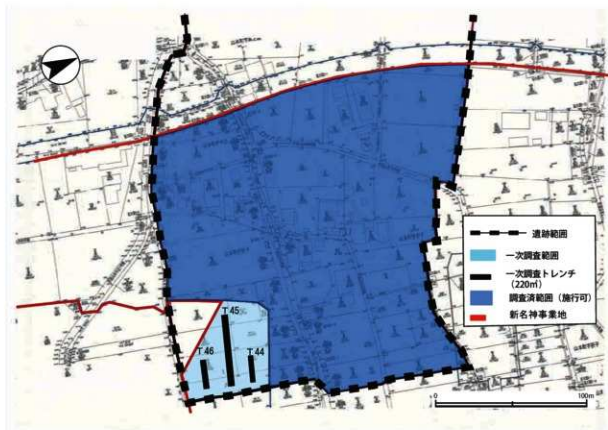


図 10 調査坑位置図（1:2,500）

## 5 折子遺跡（一次）

### 1. はじめに

折子遺跡は、鈴鹿市山本町に所在し、内部川が形成する扇状地上に位置する中世の遺物散布地である。分布調査では山茶碗片などの散布が確認されている。

### 2. 調査の概要と結果

調査は幅2.5mの調査坑を5箇所（T7～T11）設定して実施した（図11）。

遺構検出面は黄褐色土を主体とする地山で、遺構検出面までの掘削深度は0.3～1.1mである。

調査の結果、T10・11から現代の溝を検出した他は、いずれの調査坑からも遺構・遺物は発見されなかった。なお分布調査で発見された遺物については、扇状地上流から流れ込んだものであると考えられる。

以上の調査結果から、当遺跡の高速道路建設予定対象範囲について、二次調査の対象外とした。



写真 21 調査坑8 東壁（西から）



写真 22 調査坑9（東から）

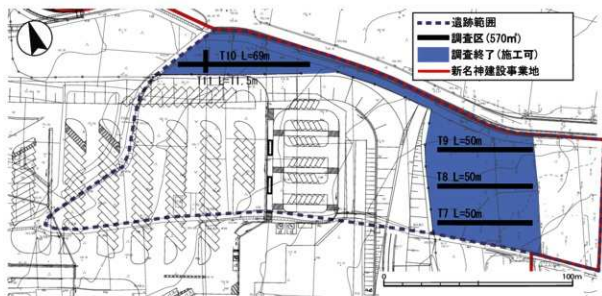


図 11 調査坑位置図（1:2,000）



## 6 釜垣内遺跡（工事立会）

### 1. はじめに

当遺跡は鈴鹿市小岐須町に所在し、鈴鹿山脈の仙ヶ岳と入道ヶ岳より発する御幣川北岸の扇状地上に立地する。周囲には上分田遺跡や寺垣内遺跡等の中世の遺物散布地、戦国時代の築城と伝えられる小岐須城跡がある。

平成24年度から27年度に実施された調査では、鎌倉時代を中心とする屋敷地やその集落の中心を流れる川の存在が明らかとなった。

### 2. 調査の概要と結果

調査は事業地に1箇所の調査坑（計50m<sup>2</sup>）を設けて行った。検出面は黄褐色シルト～細礫層を主体とする地山であり、遺構検出面までの掘削深度は0.6m～0.9mである。検出面の標高153～154mと西から

東へ緩く傾斜した地形となる。

第2次調査で検出した区画溝の続きを想定したが、調査の結果、近年の水道工事等によって攪乱されており、遺構、遺物は確認できなかった。



写真 23 調査区（南から）

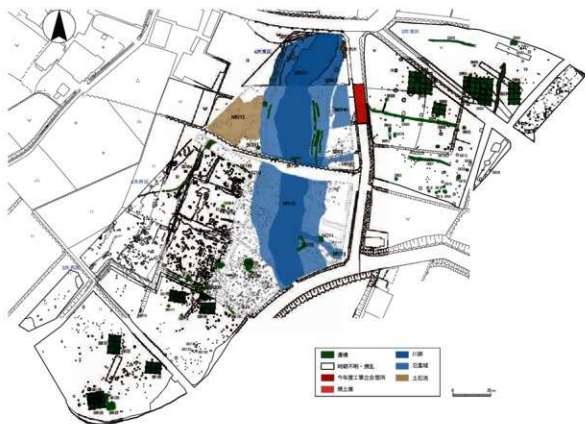


図 12 調査坑位置図（1:2500）



